府中遺跡と古墳時代の和泉地域

大阪市立大学　岸本直文

1．ヤマト（邪馬台）国と倭国の成立―弥生時代後期＝第Ⅴ様式土器（1 世紀～ 2 世紀前半）

（1）ヤマト（邪馬台）国は 1 世紀に形成される畿内圏→弥生時代中期から後期への社会変動

・鉄器化の進行と鉄素材確保を目的とする 1 世紀の列島西半部における広域地域圏の連動的形成／ヤマト国もそのひとつ／主導したのは大和川流域の中河内（・南大和）／周辺の拠点集落の解体（銅鐸埋納）／高地性集落／ 500 年間居住してきた拠点集落の解体と第Ⅴ様式化は圧力をかけての強力の発動／1 世紀前半に統合が始まり 1 世紀中頃には形成か／ヤマト国王もいるだろう

・広域地域圏の形成＝交易関係の形成＝地域王権間の関係形成（連携的側面／競合的側面）

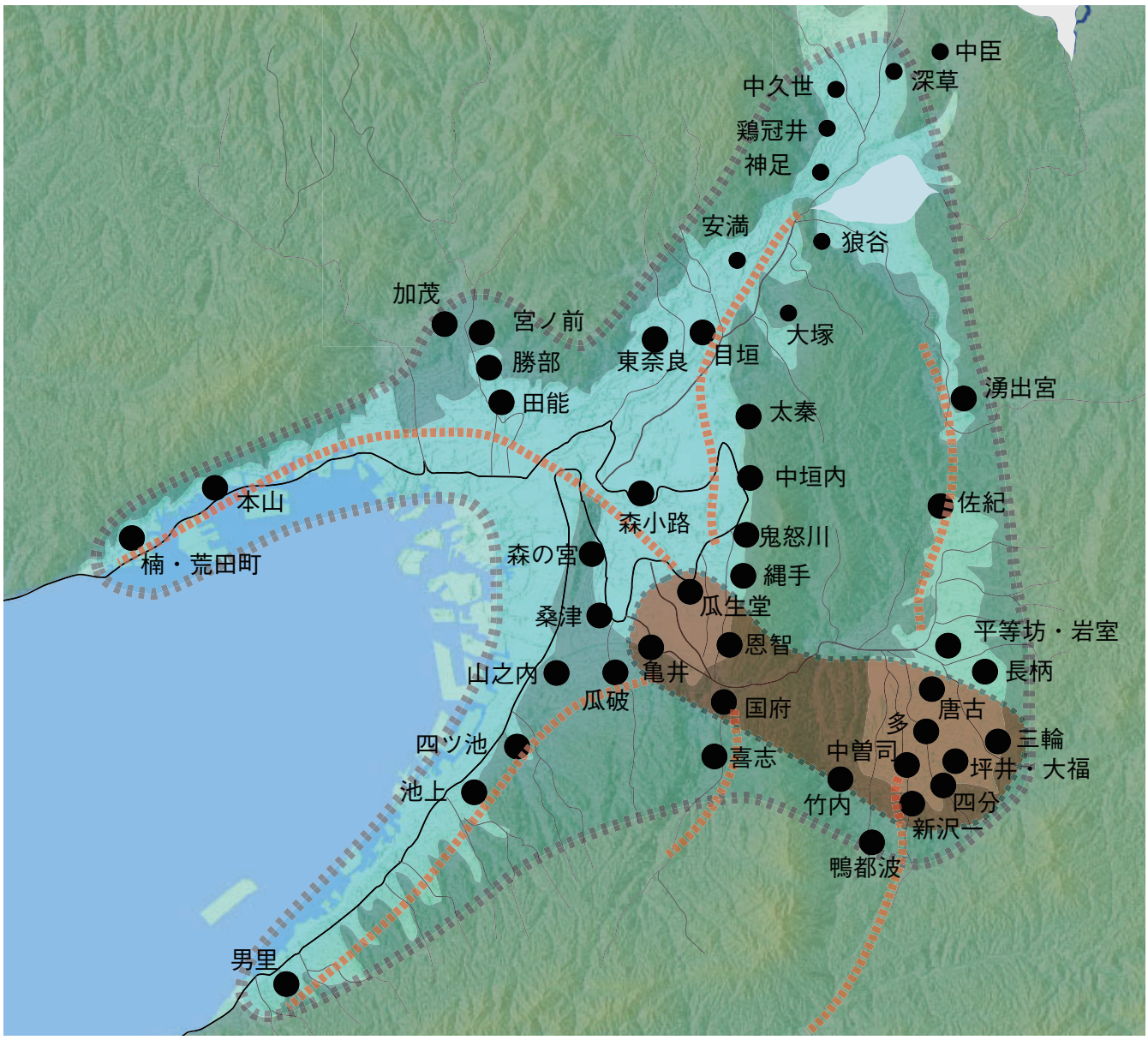

図 1　1 世紀のヤマト（邪馬台）国の形成

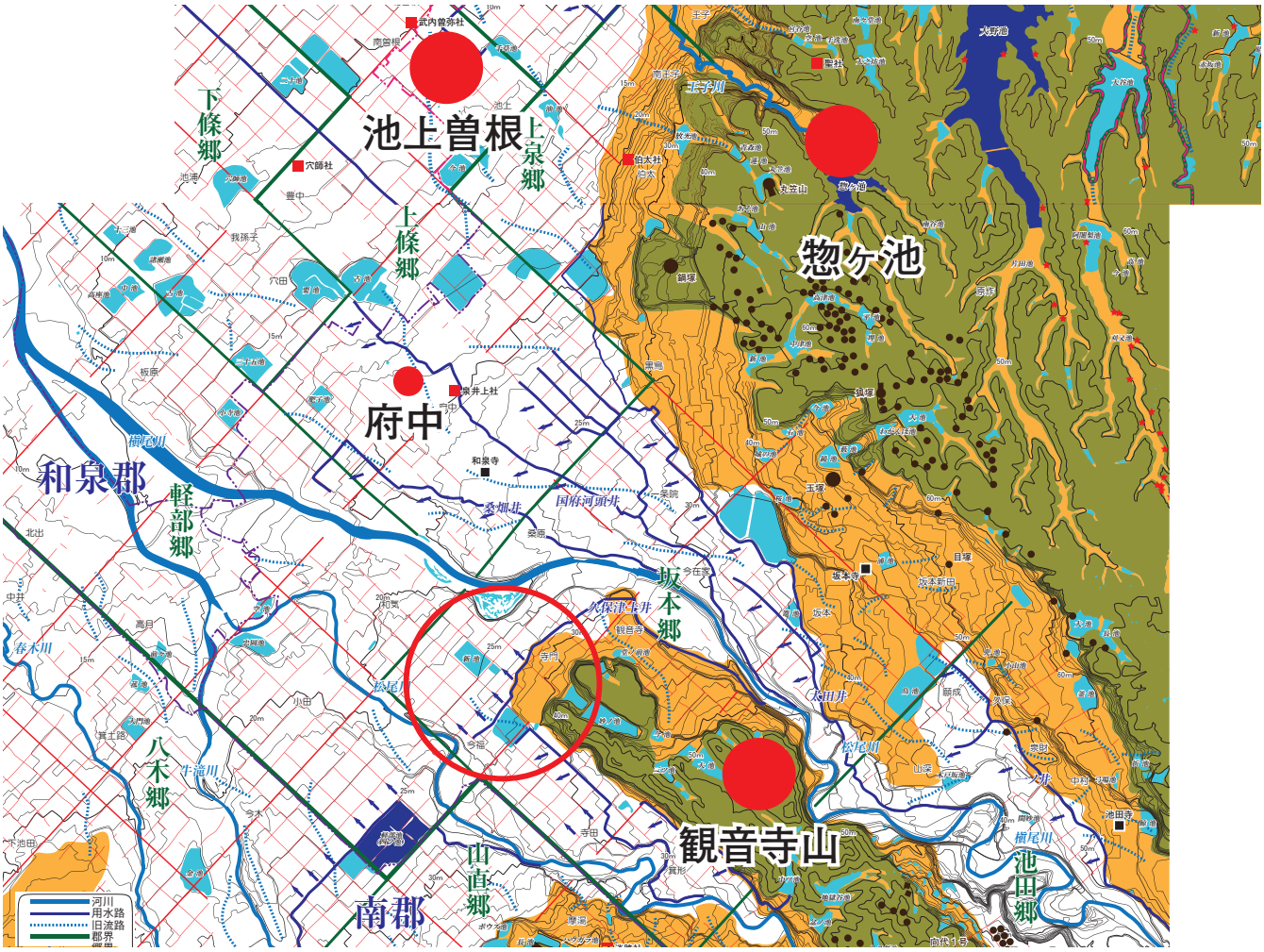

図２　弥生時代中期から後期への社会変動

※東方社会に生まれた地域諸王権が北部九州そして東アジアに接続する

（２）ヤマト国の中心性の発現

・のちの令制５箇国をたばねるヤマト国の権力（北部九州はナ国・イト国のまま統合進まず）

・１世紀後半の漢鏡５期鏡がヤマト国に波及→ヤマト国は北部九州に肩をならべる？

※伝世鏡をそのまま認めることは不適当か→数は差し引かないといけないが存在するとみる

・近畿式銅鐸からみた周辺への働きかけ

・２世紀後半に顕在化するヤマト国の求心性は１世紀から２世紀前半を通して生まれる

（３）２世紀初頭の倭国成立―倭国王帥升等の 107 年朝貢

・１世紀に形成された諸王権の集団的朝貢／帥升は代表者〔西嶋 1992〕→倭の諸王権が結びついた一定の実態（「倭国」成立の画期）→中国側では「倭国」「倭国王」成立の起点と認識〔仁藤 2004〕

・倭の諸王権が連帯した「倭国」が 107 年の直前に成立（ナ国 57 年朝貢から 50 年間における社会変化）

・倭国王帥升は１地域王権の王が倭国の代表となったものか

・帥升は北部九州の王？（イト国王？）／ヤマト国王？〔岡村 1986〕

※北部九州を含む諸王権が連帯して、鉄素材や中国の文物などの安定入手という共通利害に対処する社会関係を形成→倭国王がどこであれ「倭国」形成を促したのは東方社会の成長では？

◆【和泉】

・池上曽根遺跡の解体／惣ヶ池遺跡や観音寺山遺跡などの高地性集落

・府中一帯の中期後半に現れた集落も継続せず
・後期集落は中期までの拠点集落が解体され分散／一部が高地へ移動
・一部の大規模高地性集落は比較的短期間で山を下りるが観音寺山は長期存続
※和泉はのちの畿内の一部となるが、ヤマト国形成の社会変動や第Ⅴ様式化の影響がおよぶが、できあがったヤマト国の中心である中河内・南大和からすると縁辺にあり、その後の変化は激しくない？。

2．ヤマト国優位への転換―弥生時代終末期＝庄内式土器（2 世紀後半）

（1）2 世紀後半（庄内式＝弥生時代終末期）における纒向遺跡形成とヤマト国の優位性

・C14 年代にもとづく庄内式の開始期の特定はなお課題　2 世紀中頃か
・ヤマト国は奈良盆地東南部に本拠地である纒向遺跡を建設
・ヤマト国は求心力をもつ（纒向遺跡に他地域の人々が集まっている）→ヤマト国優位の顕在化
・ヤマト国王墓である纒向石塚の築造＝前方後円墳誕生（2 世紀後半）→以後継続的築造
・中国から北部九州を飛び越えて漢鏡 7 期の鏡を輸入そして分配
・東大寺山古墳の中平[184-189]年銘鉄刀→ 180 年代のヤマト国と中国の外交〔仁藤 2004〕
・ナ国・イト国は引き続き後退せず→連帯関係のなかで東方社会のなかでのヤマト国の求心力が強まりナ国・イト国をも統制下に置く転換→ナ国・イト国の地理的優位性に変わりなく交易拠点としての機能もそのままに東方社会の求心核であるヤマト国が政治的優位に立つ（諸王権の支持）

（2）2 世紀後葉の倭国乱とその意義

・倭国乱の実態解明が課題（瀬戸内一帯に現れる第 2 次高地性集落）
・ヤマト国が求心性をもちながら生じる倭国乱→優位性進行に対する反動か（衝突と決着が必要）

◆【和泉】
・庄内式の時期に第Ⅴ様式が継続＋わずかな庄内式土器
・倭国が確立しても、倭国の盟主であるヤマト国の縁辺的立場が継続

3．卑弥呼共立による倭国確立―古墳時代早期＝庄内 3 式～布留 0 式（3 世紀前半）

（1）倭国確立（卑弥呼共立は 201 年か）

・倭国乱という戦乱の持続回避のための休戦合意としての卑弥呼共立〔山尾 1983〕
・ヤマト国の圧倒的優勢による決着でない→関係諸地域の協調による和平の枠組み
・擁立された卑弥呼は「鬼道」を事とする神がかり能力に長けた巫女
・3 世紀前半の卑弥呼生前におけるヤマト国王墓の築造継続／ヤマト国王墓とは別に倭国王墓である箸墓古墳を造営→ヤマト国王がそのまま倭国王になるのでなく倭国王の地位は別〔東 2006〕
・2 世紀までの倭の諸王権の代表としての「倭国王」→「倭国乱」後は協調・合意の結果であるがゆえに諸王権が公式に承認した地位としての「倭国王」に
・〈魏志倭人伝〉ヤマト国を盟主とする約 30 国連合

（2）初代倭国王卑弥呼の 3 世紀前半（古墳時代早期）の倭国 1

・楽浪を掌握した（3 世紀初め）公孫氏政権（燕国）のもとでの帯方郡帰属
・（いわゆる纒向型）前方後円墳（ヤマト国王墓）の共有開始（ヤマト国を盟主とする倭国の枠組みに参画する表象として受け入れ→前方後円墳が各地の首長が共有するものへと転化する変革）

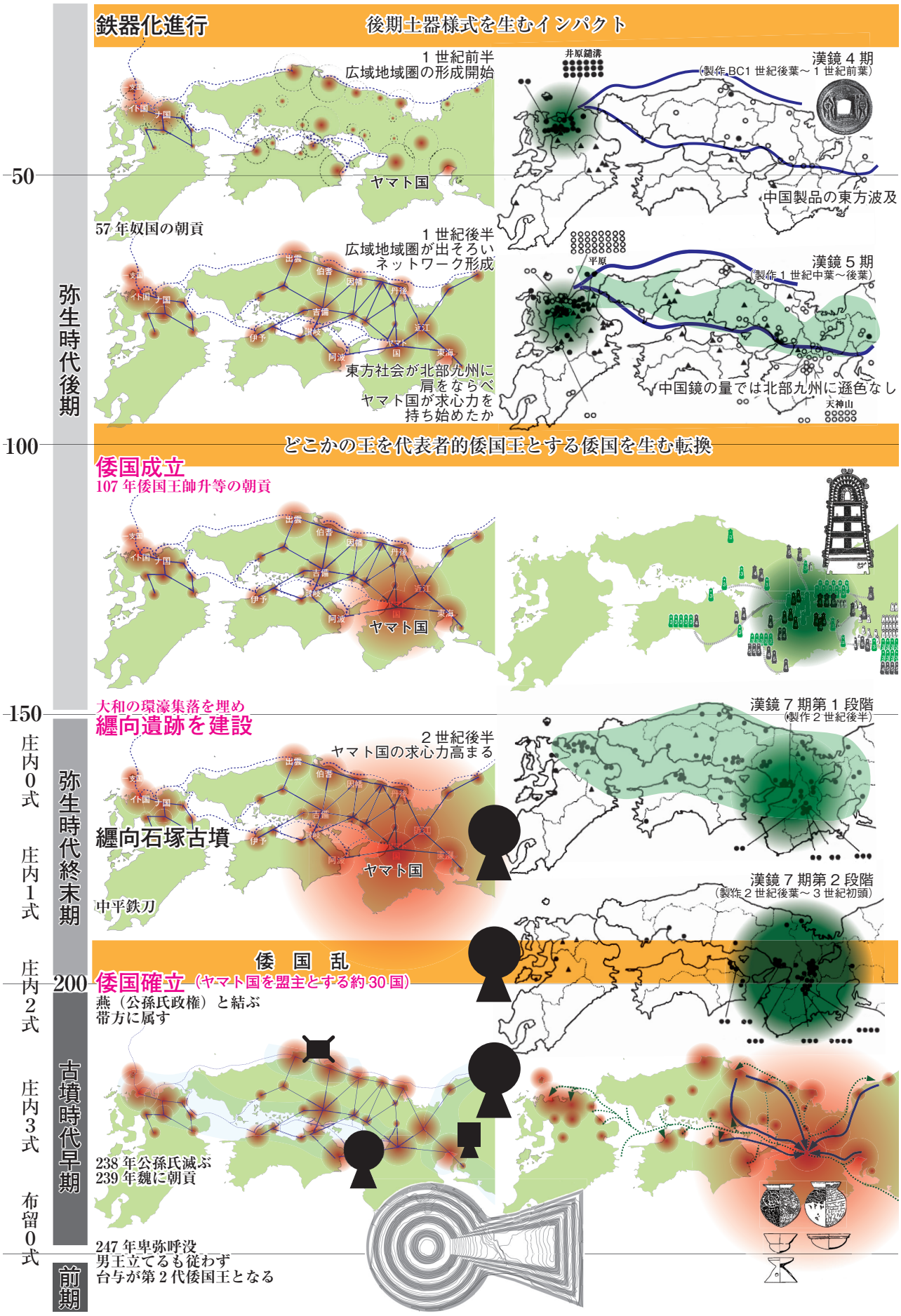

図３　ヤマト国形成から倭国の成立から確立までの歴史像

・ただし、この段階の倭国は瀬戸内で結ばれる地域を中心とする範囲の倭国（東日本／山陰）

◆【和泉】

・弥生時代終末期に同じ

・この時期の画文帯神獣鏡が、のちの和泉黄金塚や風吹山古墳から出土→王権からの働きかけ

4．オオヤマト段階―古墳時代前期前半＝布留 0 式～布留 1 式（3 世紀後半～ 4 世紀はじめ）

（1）卑弥呼生前の 3 世紀前半（古墳時代早期）の倭国 2

・238 年に公孫氏は魏に滅ぼされ 239 年に卑弥呼は魏に朝貢（三角縁神獣鏡→配布開始）

・魏は卑弥呼を親魏倭王に任命し、諸々の引き出物を賜り厚くもてなす

・箸墓古墳（初代倭国王墓）の築造（生前造墓―箸墓型前方後円墳）→ 247 頃卑弥呼没
→巨大な倭国王墓造営と本格的な前方後円墳共有システムは卑弥呼生前に準備

・3 世紀中頃に構想された倭国王墓を規範とする前方後円墳の共有システムは 3 世紀前半の拡大発展
→規範性強化／相似墳を複製する仕組みの整備／墳丘規模規定→厳格に身分秩序を表現する制度へ

（2）古墳時代前期（3 世紀後半～）

・前方後円墳が列島へ波及（ただし東日本は前方後方墳が圧倒的）→倭国が列島規模に拡大

・急速な波及→弥生時代以来の各地における集団関係そのままに倭国の枠組みへの参画（本領安堵）

※中小規模の前方後円墳・前方後方墳が数多く築造される→緩やかな包摂関係

・倭国への参加（王墓築造への奉仕）⇄三角鏡などの威信材や鉄などの必需物資の獲得

・4 世紀前葉の崇神期に前方後円墳の規範性が強まる（前方後方墳の消滅）

◆【和泉】

・和泉にオオヤマト段階の前方後円墳なし（三角縁神獣鏡は和泉黄金塚の 1 面）

・惣ヶ池遺跡周辺で前期前半の埴輪出土？→信太山にこの時期の古墳がある？

・堺市下田遺跡（石津川河口部）　布留式古段階になると（下田Ⅲ＝ 3 世紀後半―4 世紀はじめ）、布留式へ急速に転換　王権による石津川河口部の港津の把握

・府中遺跡でも庄内式の段階に比べて布留 1 式の遺構・遺物が顕在化→その程度は？

5．佐紀段階の前方後円墳―古墳時代前期後半＝布留 2 式～布留 3 式（320-390）

（1）佐紀遷都

・纒向遺跡は布留 1 式のあと遺構・遺物は希薄化→布留 2 式期からは佐紀が王権本拠か

・おおむね布留 1 式と布留 2 式の境は 320 年頃（崇神没年）か→崇神没後に本拠を移動

・伽耶の鉄素材は北部九州や出雲と狗邪韓国の間の交易から→倭国―金官国間の国家間交易へ

（2）佐紀政権下の基本動向

・オオヤマト段階の有力首長系譜はほぼ衰退し、重要な交通路沿いに大型前方後円墳が出現

・4 世紀中頃に茅渟海・丹後半島から倭人派兵（369 年の百済との軍事同盟により増強）

※軍事的協力を基軸に特定首長のみを起用→王権と地域首長の関係は変質

◆【和泉】4 世紀後半の前方後円墳出現

・堺市長山古墳、和泉市黄金塚古墳・菩提池西古墳（信太山丘陵にある一辺 10 mほどの小方墳。3 号墳から典型的なⅡ期の埴輪―規格的な鰭付円筒埴輪＋形象埴輪―が出土）・大園遺跡の埴輪（海浜部に未知の前方後円墳が

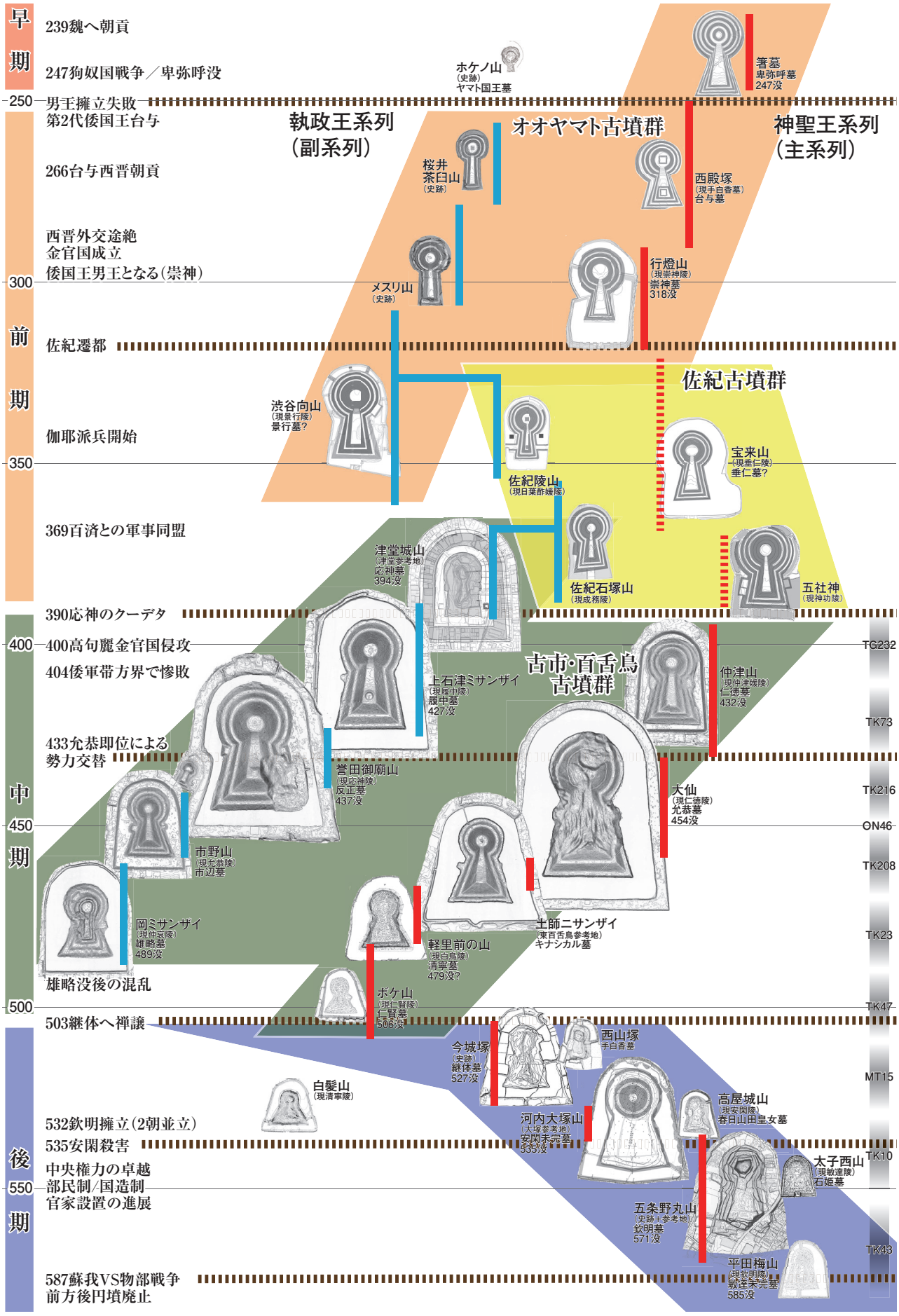
早期
239魏へ朝貢
247狗奴国戦争／卑弥呼没
250
男王擁立失敗
第2代倭国王台与
266台与西晋朝貢
西晋外交途絶
金官国成立
倭国王男王となる（崇神）
300
前期
佐紀遷都
伽耶派兵開始
350
369百済との軍事同盟
390応神のクーデタ
400
400高句麗金官国侵攻
404倭軍帯方界で惨敗
433允恭即位による
勢力交替
中期
450
雄略没後の混乱
500
503継体へ禅譲
後期
532欽明擁立（2朝並立）
535安閑殺害
中央権力の卓越
部民制/国造制
官家設置の進展
550
587蘇我VS物部戦争
前方後円墳廃止
執政王系列
（副系列）
オオヤマト古墳群
神聖王系列
（主系列）
佐紀古墳群
古市・百舌鳥
古墳群
箸墓
卑弥呼墓
247没
ホケノ山
（史跡）
ヤマト国王墓
桜井
茶臼山
（史跡）
西殿塚
（現手白香墓）
台与墓
メスリ山
（史跡）
行燈山
（現崇神陵）
崇神墓
318没
渋谷向山
（現景行陵）
景行墓?
佐紀陵山
（現日葉酢媛陵）
宝来山
（現垂仁陵）
垂仁墓?
佐紀石塚山
（現成務陵）
五社神
（現神功陵）
津堂城山
（津堂参考地）
応神墓
394没
上石津ミサンザイ
（現履中陵）
履中墓
427没
仲津山
（現仲津媛陵）
仁徳墓
432没
誉田御廟山
（現応神陵）
反正墓
437没
大仙
（現仁徳陵）
允恭墓
454没
市野山
（現允恭陵）
市辺墓
岡ミサンザイ
（現仲哀陵）
雄略墓
489没
土師ニサンザイ
（東百舌鳥参考地）
キナシカル墓
軽里前の山
（現白鳥陵）
清寧墓
479没?
ボケ山
（現仁賢陵）
仁賢墓
506没
TG232
TK73
TK216
ON46
TK208
TK23
TK47
MT15
TK10
TK43
白髪山
（現清寧陵）
今城塚
（史跡）
継体墓
527没
西山塚
手白香墓
河内大塚山
（大塚参考地）
安閑未完墓
535没
高屋城山
（現安閑陵）
春日山田皇女墓
太子西山
（現敏達陵）
石姫墓
五条野丸山
（史跡+参考地）
欽明墓
571没
平田梅山
（現欽明陵）
敏達未完墓
585没

図４　倭国王墓の２系列

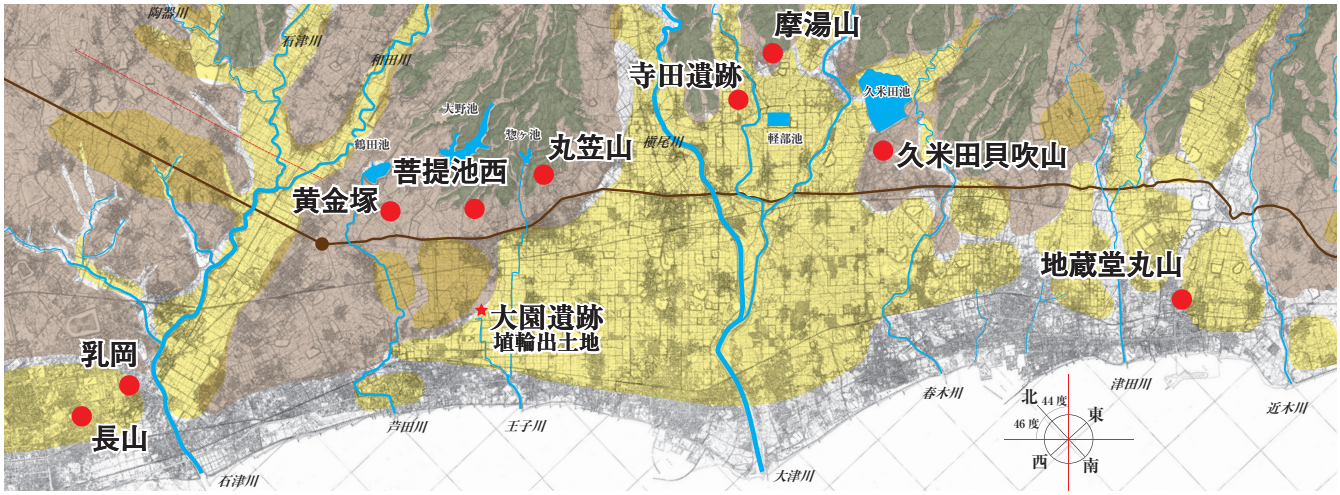

図５　４世紀後半の和泉における前方後円墳の出現

あるか）・丸笠山古墳、岸和田市摩湯山古墳・久米田貝吹山古墳、貝塚市地蔵堂丸山古墳

（２）前方後円墳出現の意味

・４世紀中頃から後半に和泉地域の重要性が急速に高まる

・明石海峡に面した五色塚古墳（194 m）の出現と連動→大阪湾岸の海上交通

・丹後も同様に 200 m級の前方後円墳が突然出現→共通するのは海上交通

・海上交通に長けた集団の取り込み→目的は４世紀後半の半島派兵

・和泉地域は畿内から瀬戸内ルートで派兵する輸送にかかわる→住吉から堺にかけての地域が港津／和泉は大型船の建造や船舶操作の技術力が期待されたか（武器生産？←寺田遺跡／イニシキ／鳥取）

◆【府中遺跡】

・前方後円墳の出現からすると、この時期に遺構・遺物が充実しておかしくない

・大溝の掘削され祭祀場が現れる→首長層の居住域が定まる？

・丸笠山古墳は府中遺跡の首長か

６．河内政権の時代

—古墳時代中期 =390 年～

（１）390 年の応神のクーデタ

・河内は、和泉からの出兵を含む、瀬戸内ルートによる西日本諸地域との関係構築の拠点に→王権側から王族が派遣されたか（津堂城山古墳の被葬者像）

・権力基盤を固め 390 年に佐紀の王統を倒すクーデタ

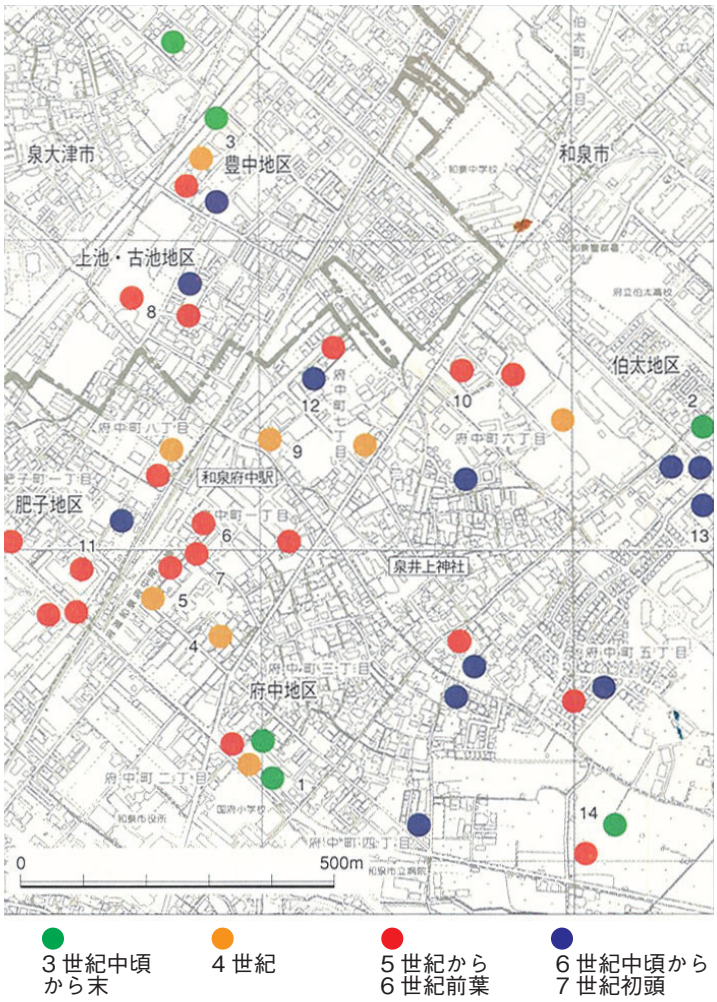

図６　４世紀以降の府中遺跡の充実

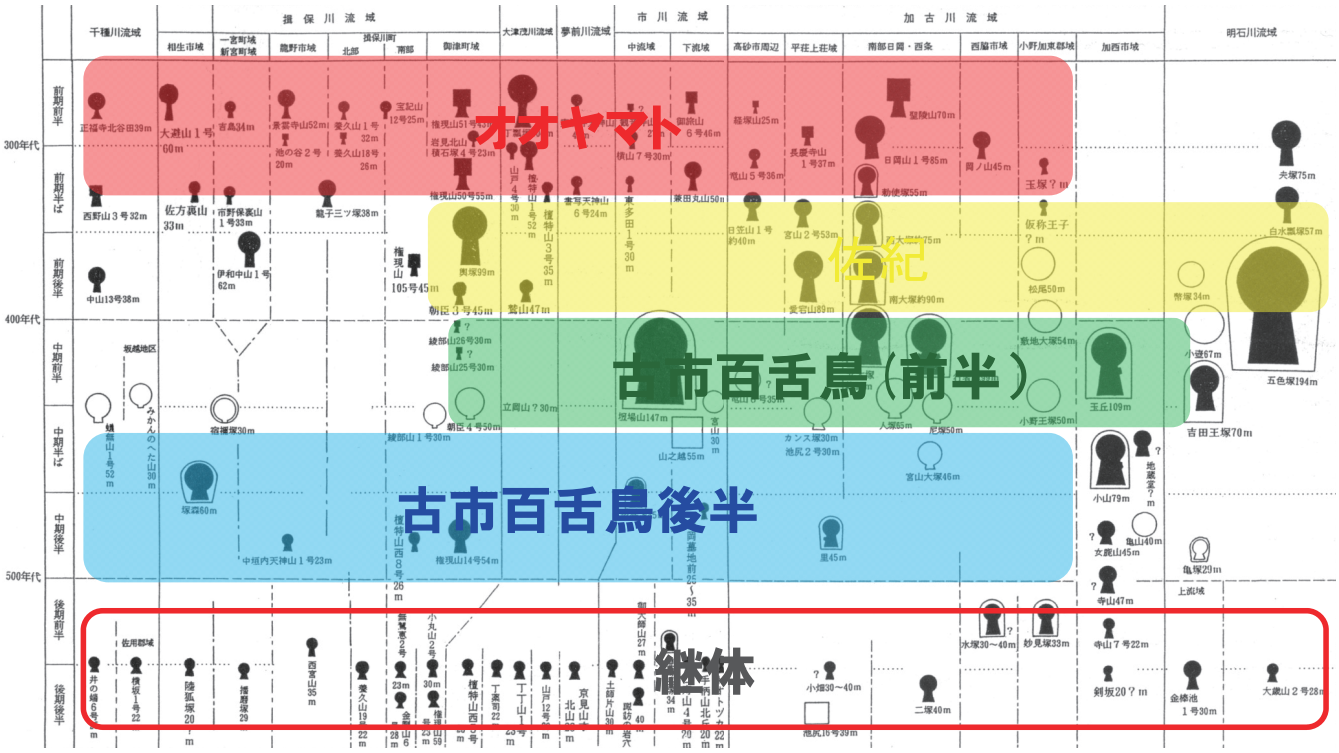

図７　播磨における古墳編年と古墳時代の政治変動

※中期初頭の和泉黄金塚は佐紀王権のもと前方後円墳を築造→最新式の帯金式短甲２組→河内で権力を構築しつつある津堂城山古墳の被葬者との関係を強める

（２）河内政権下の基本動向

・佐紀政権下での地域首長は断絶ないし退転→政治地図は一変する

◆【和泉】河内政権下の前方後円墳築造規制→帆立貝形・円墳に

・（黄金塚古墳）→信太貝吹山古墳→カニヤ塚古墳

・（丸笠山古墳）→鍋塚古墳→玉塚古墳

・（久米田貝吹山古墳）→風吹山古墳→女郎塚古墳

※有力前方後円墳はなくなる　首長系譜は存続するも従属的に（連続するかどうかも検討が必要）

※有力前方後円墳は淡輪（紀氏）　5世紀前半から中頃に西陵古墳→ニサンザイ古墳＋西小山古墳

・5世紀前半の瀬戸内海上交通は葛城氏―紀氏のもと和泉在地勢力が担ったか（同族系譜）

・陶邑大野池地区（信太山）・光明池地区の窯跡は在地勢力主導という（東部の王権直轄窯と異質）

※海上交通を担う和泉の勢力は朝鮮半島に赴いていておかしくない→陶工の将来

◆【府中遺跡】

・01-116地点で居館?→遺跡の中心が移動した?→佐紀政権から河内政権への変化を反映?

・5世紀の有力層居住域の存続期間は?

・韓式系土器の出土→地域首長はそれぞれ渡来系集団を抱える

７．河内政権の主導権交替（433 年）と根使主事件（470 年）

（１）433年允恭即位による主導権交替（大仙古墳は允恭陵）　履中系→允恭系へ

・吉備氏・葛城氏の弾圧（前代の履中系王統およびそれと結びついていた有力氏族）

※5世紀中頃まで紀氏はなお起用（淡輪ニサンザイ古墳）

・允恭の茅渟宮（府中遺跡近傍か?）造営・日根野猟遊伝承→王権の和泉掌握へ

（2）470年雄略による根使主弾圧

・瀬戸内海上交通を担う和泉の勢力の有力氏族か→府中遺跡居住か?

・允恭―雄略による前代までの地域有力層の弾圧が和泉在地勢力におよぶ

・和泉の有力氏族は没落（古墳の築造は5世紀中頃まで）→紀角宿祢系から豊城入彦系へ

※従来の有力層のもとにあった別系氏族を起用→これによる氏族の分裂

・茅渟県・日根県の設置（王権拠点）→茅渟県主の起用（根使主の配下にあった別系氏族か?）

※紀氏も後退（ニサンザイ古墳のあと断絶）と分裂　紀臣系から紀安朝臣系へ

・根使主の集団の半分は茅渟県主の嚢かつぎとし（のちの坂本氏）→阪本に移す

もう半分は大草香部民とする→大鳥郡日下

※府中遺跡にいた根使主をリーダーとする集団は近傍に移配

※茅渟県の経営本拠=経営を委任された茅渟県主の居住域もまた府中遺跡一帯か（入れ替え）

→470年前後で府中遺跡のなかでも中心域が変動している可能性

（3）大園遺跡（信太山丘陵から続く段丘面）

・5世紀後葉の大園古墳

・6世紀に掘立柱建物からなる大集落　＋大壁住居・韓式土器→渡来系（信太首氏・取石連氏・高志連氏）

・王権によるそれまで可耕地でなかった段丘面の開発のために渡来系集団を入植させる

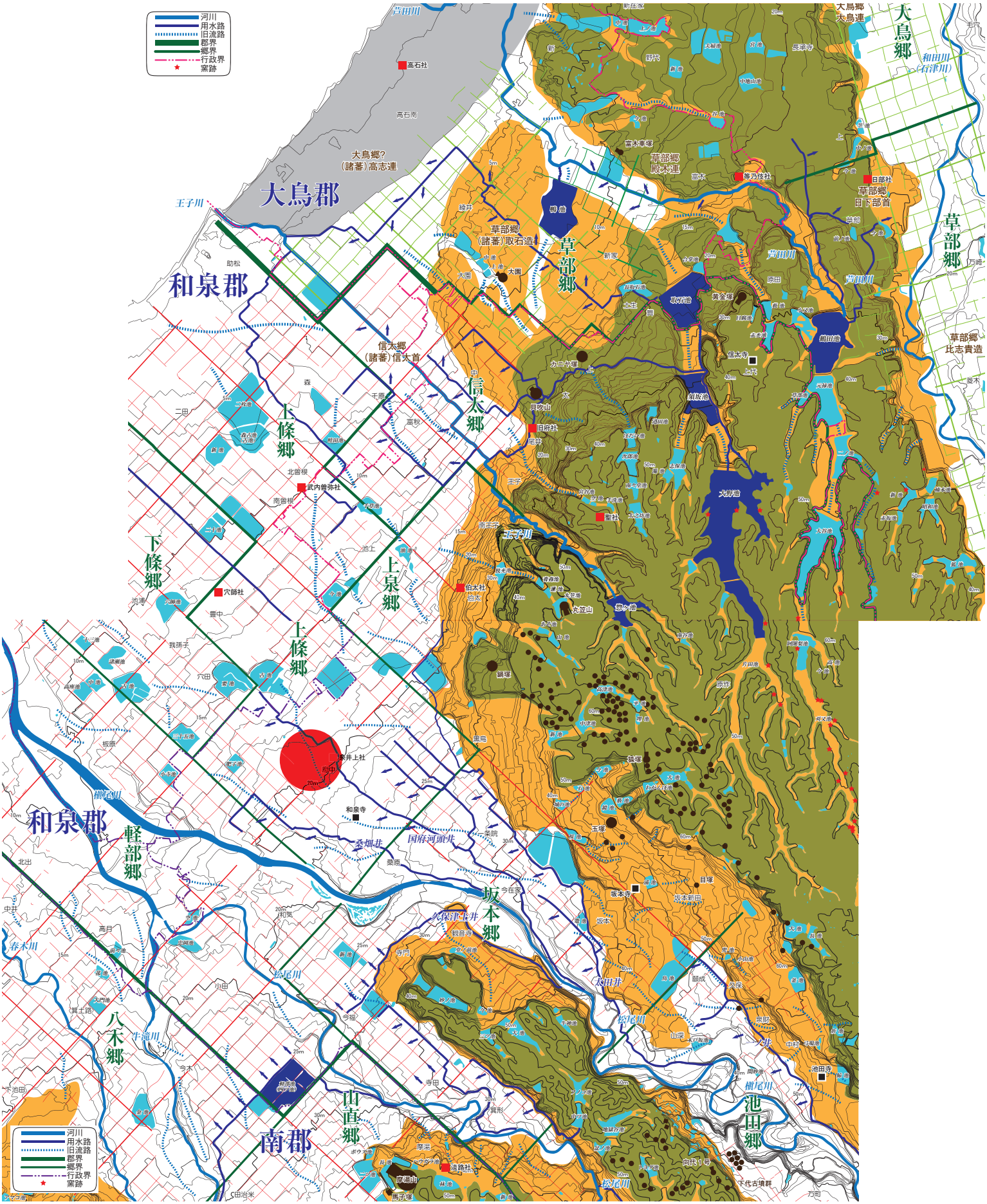

図８　府中遺跡を考えるための地図